前報に示したように、播種期のくりさげによって害虫による被害を少なくさせると、ある程度の収量をうるのではないかとの見とおしをえたので、実際に秋大豆を用いて播種期試験を行い、その実用性を検討することとした。

試験は1952～1954年の3年間にわたって行ったが、その結果を示せば第1図・第1表のとおりである。年次によりいくらかのずれは認められるが、おむね7月20日頃に播種した場合に最も収量が高かった。各年とも早播ほど生育はすぐれているが、害虫による被害が多く、不稔も多く、特に、早播がかえって収量が低いものと思われる。なお大豆タキモグラジ

第1表　収穫物調査成績（1953）

<table>
<thead>
<tr>
<th>播種月日</th>
<th>7.10</th>
<th>7.17</th>
<th>7.24</th>
<th>7.31</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>高発</td>
<td>572</td>
<td>513</td>
<td>479</td>
<td>346</td>
</tr>
<tr>
<td>高発</td>
<td>15.8</td>
<td>14.7</td>
<td>13.9</td>
<td>12.5</td>
</tr>
<tr>
<td>分枝数</td>
<td>1.5</td>
<td>2.1</td>
<td>0.8</td>
<td>1.3</td>
</tr>
<tr>
<td>分枝数</td>
<td>18.8</td>
<td>15.4</td>
<td>2.9</td>
<td>5.3</td>
</tr>
<tr>
<td>葉数</td>
<td>35.5</td>
<td>38.4</td>
<td>26.9</td>
<td>17.5</td>
</tr>
<tr>
<td>花序数</td>
<td>55.3</td>
<td>82.0</td>
<td>56.2</td>
<td>38.1</td>
</tr>
<tr>
<td>不稔率%</td>
<td>18.3</td>
<td>11.7</td>
<td>9.7</td>
<td>2.9</td>
</tr>
<tr>
<td>不稔率%</td>
<td>33.5</td>
<td>60.2</td>
<td>40.2</td>
<td>31.1</td>
</tr>
<tr>
<td>会芽数</td>
<td>34.4</td>
<td>26.6</td>
<td>26.5</td>
<td>18.4</td>
</tr>
<tr>
<td>会芽数</td>
<td>29.6</td>
<td>18.3</td>
<td>23.4</td>
<td>13.3</td>
</tr>
<tr>
<td>生長点不稔率%</td>
<td>0</td>
<td>8.2</td>
<td>23.8</td>
<td>14.8</td>
</tr>
<tr>
<td>高発</td>
<td>6.3</td>
<td>15.8</td>
<td>46.8</td>
<td>57.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

パラエによる実験の程度については明らかでないが、7月下旬ないし、8月上旬に播種の場合は生長点が枯死したり、節間が萎縮して生育を阻害される割合が高くなり、晚播による減収度が一層増長しているように考えられる。そこでこれらを1953年度にホリドールを開花まで1週間後に播種する区を設けてタキモグラジ

第1図　播種期と収量の関係

*九州農業試験場